

姑獲鳥(うぶめ)の夏

2005(平成17)年9月3日鑑賞(ホクテンザ2)



監督=実相寺昭雄/原作=京極夏彦/出演=堤真一/永瀬正敏/阿部寛/宮迫博之/原田知世/田中麗奈/篠原涼子/すまけい/いしだあゆみ(日本ヘラルド映画配給/2005年日本映画/123分)

……「この独特な世界観の映画化は不可能!」と言われてきた京極夏彦原作のベストセラー小説が遂に映画化。さて、その出来は……? 私は事前にパンフレットを丹念に読み、姑獲鳥(うぶめ)とは? 京極堂のキャラは? その他数々の予習を完了。その上で、密室からの人間消失のナゾに挑むストーリー展開と、昭和27年という時代を背景とした映像美を堪能しようとしたが、それでもこの映画はサッパリわからない……? これだけ予習しても私の頭がついていかないのに、京極堂が、「この世には不思議なことなど何も無いのだよ、関口君」と言っているのを聞くと、腹が立ってくるのも当然……? こんな自己満足的な映画の作り方では、『横溝正史シリーズ』や『金田一耕助シリーズ』を上回るような『京極堂シリーズ』はムリ。この第1弾で打ち切りとなるのでは……?

京極夏彦のベストセラー小説の時代は……?

この映画の原作は京極夏彦で、今から11年前の1994年9月に講談社ノベルスから刊行されたデビュー長編小説『姑獲鳥の夏』。私は京極夏彦の小説を全く読んでいないからよくわからないが、この『姑獲鳥の夏』の時代設定は昭和27年という戦後まもなくの時代。かつて1970年代に一世を風靡した、角川映画による『横溝正史シリーズ』『金田一耕助シリーズ』とよく似たような時代背景というイメージがあったが、そこで描かれるさまざまなテーマについては、まずその時代背景を理解しなければわからないもの……?

🎬 「映画化不可能」だったのでは……？

この映画のパンフレットには、「その独特な世界観を映像化することは不可能とされてきたシリーズ第1作」と書かれている。しかし、他方で同時に、①日本映画界最高のスタッフ・キャストが集結！、②映像化が許されなかった大ベストセラー、③「京極堂シリーズ」第1弾、遂に完成！ と大宣伝。しかして、その出来は……？ 時代背景を感じさせるセットは見事で、こだわりの大きさが十分理解できるが、ストーリーそのものは……？

🎬 京極堂によるナゾ解きは……？

イギリスには名探偵シャーロック・ホームズがいたし、近年のアメリカ映画では、刑事コロンボによるナゾ解きは、どれをみても面白いものだった。また日本でも、かつては明智小五郎探偵がいたし、前述の金田一耕助も大フィーバーした名探偵。しかし、『姑獲鳥の夏』でデビューし、今や400万部を超えるという驚異的な売上を記録している京極堂氏は探偵ではない。すなわち、京極堂こと中禅寺秋彦氏（堤真一）は、①古本屋「京極堂」の店主であり、②武蔵清明神社の神主であり、そして③新時代の謎解き“憑物落とし”というキャラクター。そしてこの彼の名文句は、親友の優柔不断な小説家である関口巽（永瀬正敏）に対して語りかける「この世には不思議なことなど何もないのだよ、関口君」というもの……。そんな天才の京極堂氏が、この映画で挑むナゾ解きとは……？

🎬 えらくハナにつく京極堂の博識さと自信ぶり

京極堂氏のキャラは、古本に囲まれた屋敷の中で、上質の浴衣を着て生活している博識の人ということ（？）みたいだが、私には、そういう雰囲気の中で、物知り顔でベラベラしゃべっている彼の姿を観ていると、それがえらくハナについてくる。それはなぜか……？

第1は、私が全然知らないさまざまな知識が次から次へと、その口でしゃべられるから。もっとも、これには半分私のひがみが入っているかもしれないが……。そして第2は、この映画全般を通して言えることだが、京極堂さん、なぜあんな

には、そんなにすべての真理がお見通しなの……？　と思わざるをえないこと。刑事コロボだって、金田一耕助だって、いろいろと考え、試行錯誤をしながら、最後にやっと1つの結論に至るはず……。そして、いわゆる推理小説の面白さはその思考過程にあるはず……。ところが、この京極堂さんは、少なくともこの映画では、全然悩んでいる雰囲気がなく、自信満々ですべてをお見通し。そしてあらゆる質問に対して、先々答えていく。これじゃ私は思わず、「あんたは神サマか！」と言いたくなってくるのだが……。さて、あなたは……？

ワケのわからない関口君のキャラ

自信満々で雄弁家の京極堂氏のキャラの対極にあるキャラが小説家の関口巽。彼には雪絵（篠原涼子）というきれいな奥さんがいるのだが、それはこのストーリーにはほとんど関係せず、問題は彼が学生時代に出したラブレター……。そして、その相手が双子のようによく似ている姉の涼子だったのか、それとも妹の榎子（きょうこ）だったのかが問題……。この2人の字は全く違うものの、発音はよく似ているうえ、「きょうこ」と聞いて「榎子」と書く人はまずおらず、「京子」と書くはず。そして「京子」と書くとそれは「涼子」とよく似た字に……。この涼子と榎子の2役を演ずるのは、最近、『サヨナラ COLOR』（04年）などいい役での出演が続く原田知世。この映画で際立っているのが、この原田知世の凛とした美しさ。その点だけは保証しておこう……。

妊娠20カ月というヘンな前提は……？

この映画のナゾ解きのテーマは「密室からの人間消失事件」だが、その前提となる設定は、夫の久遠寺牧朗（恵俊彰）が蒸発した中、久遠寺医院の娘である妻の榎子が妊娠20カ月を過ぎても出産せず、ずっと院内の書庫に閉じこもったままだということ。

そこで、榎子の姉である涼子が、牧朗の行方を捜してほしいと薔薇十字探偵社の榎木津礼二郎（阿部寛）を訪れた。他方、京極堂氏からこの探偵事務所を訪ねるように言われた関口は、そこで見た涼子の美しさに心を奪われ、榎木津とともに真相解明に乗り出したが……？

刑事の出番は……？

関口や榎木津の友人が刑事の木場修太郎（宮迫博之）だが、こんなワケのわからない事件のナゾ解きはふつうの刑事には到底ムリというもの。木場が探偵の榎木津を頼ったり、憑物落としをしてくれる京極堂氏を頼ったりするのは、本来は職務怠慢と非難されるべきかもしれないが、本件の場合はいきなりそれで正解。京極堂氏のナゾ解きを応援するだけの役割で十分と割りきるべきだろう。

田中麗奈といしだあゆみ

京極堂氏の妹である中禅寺敦子を演ずるのは、私の大好きな田中麗奈。雑誌の編集の仕事をしているが、昭和27年という時代に似合わず、ニューセンスなファッションに身を包みテキパキと兄のナゾ解きを応援……。

他方、久遠寺医院の院長である嘉親（すまけい）の妻で医院の事務長をしている菊乃を演ずるのがいしだあゆみ。彼女が京極堂氏らの調査にあまり協力的でない(?)のは、涼子が探偵に捜査を依頼したことを苦々しく思っているせい……？ セリフは少ないものの、重大なポイントを握っている女性だが……？

面白い眩暈坂……

映画の冒頭、中盤、ラストに登場するのが眩暈坂。だからという加減な傾斜が続く坂で、坂の途中で眩暈をおこすことから眩暈坂と名づけられたそうだが、何回かスクリーン上でこの坂をみていると、確かにそんな感じがしてくる。小説ではいくら文章で説明してもこういうイメージはなかなかつかめないだろうから、その点、映画はすごく便利。

古本屋京極堂はこの坂を登りつめたところにあるらしいが、そんなところに店があったのでは、古本屋としての営業は成り立たないのでは……？

まさに「妖怪小説」という形容がピッタリだが……？

京極夏彦氏自身が、自分の作品を「妖怪小説」と称しているらしいが、この映画を観ているとまさにそのとおり。したがって、この映画やその原作を理解する

ためには何よりもまず、出産で死んだ女の無念から生まれるという「姑獲鳥」のいわれを理解しなければならないし、京極堂氏の口から次々と語られる「憑物落とし」「あやかし」「オショボ」などのセリフ（専門用語）を理解しなければならない。

野村萬斎主演の『陰陽師』（01年）、『陰陽師Ⅱ』（03年）（『シネマルーム3』318頁参照）のおかげで、ここ数年「陰陽師」ブームが続いてきた。私もそれを観て、安倍晴明の「技のかけ方」を少しは勉強したが、何と京極堂氏はそれと同じようなテクニクも自分のモノに……。こりゃ、まさに神ワザとしかいいようがないか……？

2005(平成17)年9月6日記

ミニコラム

悪魔 VS 姑獲鳥、悪魔祓い VS 憑物落とし

人間は無力で小心な存在だから、洋の東西を問わず、神様・仏様にすがろうとするのは人の世の習い。ところが神様・仏様に対抗する存在が悪魔や鬼などの「邪悪なるもの」。キリスト教では、カソリック、プロテスタントを問わず悪魔の存在は公認されており（?）、『エミリー・ローズ』では、悪魔の存在を法廷で立証できるかどうか争点となった。しかし日本は、そんな根源的のところまで突っ込まないのが取り柄？ 『エミリー・ローズ』によると、「悪魔祓いの儀式」はローマ法王が3度行ったらしいが、それは信者注目の下でのイベント。したがって一介の神父が勝手にそれをやることは大問題。ところが日本ではそんな難し

いことはいわず、古本屋「京極堂」のオヤジにすぎない中禅寺秋彦が、武蔵清明神社の神主の資格をもっている（?）ため、自由に「憑物落とし」ができるらしい。この世に不思議なことがいくらでもあるのは当然。だからこそ人生や人間が面白いし、それを描く映画が面白いわけだが、京極堂の口グセは、「この世には不思議なことなど何もないのだよ」とちょっと自信過剰気味の名セリフ。このような形で西洋と東洋を比較してみるのも映画を楽しむ1つの方法。韓国映画や台湾映画も仲間に加えれば、その魑魅魍魎ぶりはなお一層……？

2006(平成18)年4月19日記